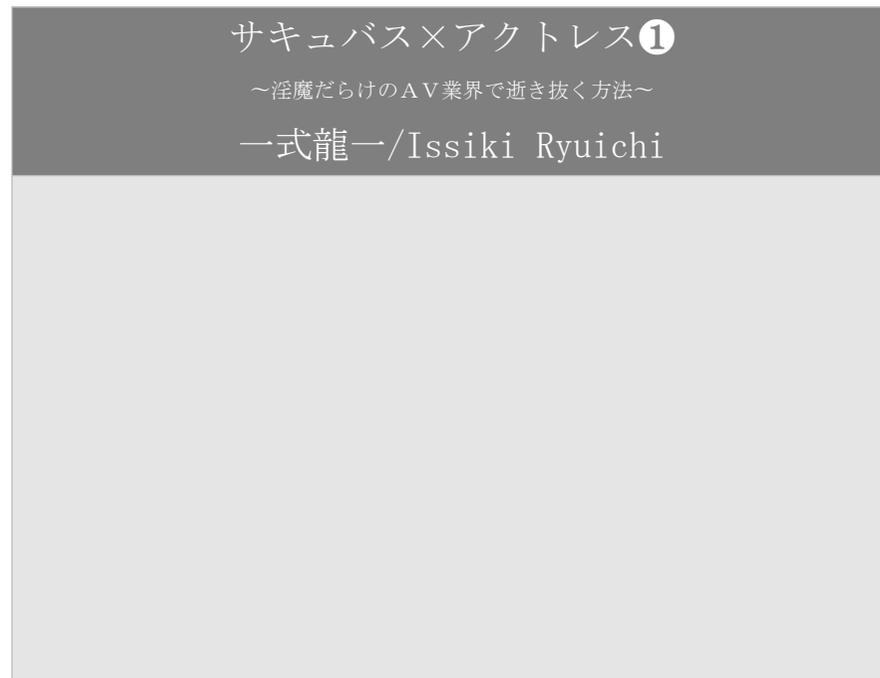


# サキュバス×アクトレス①

～淫魔だらけのAV業界で生き抜く方法～





<h2>目次</h2>	
	プロローグ……4p
	第一話……15p 「AVエキスポ」
	第二話……31p 「ちちもみ募金」
	第三話……59p 「NVR」
	エピローグ……111p
	幕間……132p 「募金の裏側」
	あとがき……163p
	▽
	<a href="#">プレイ別、ページ数案内……165p</a>



## プロローグ

頭を強く締め付けられるような感覚が俺の意識を覚醒させる。

視界は靄もやがかかったように薄暗く、眼前には不鮮明で曖昧な空間が広がっていた。何か硬い素材の拘束具で頭をきつく締め付けられているみたいに、重い頭痛が不定の間隔で訪れる。その鈍痛のせいで、目覚めたばかりの意識をすぐに沈めたくなる。久しぶりだ———と思う、それはある種の報せのようなものだった。

全身に力を込める、その行為に意味がないと分かりながらも試さずにはいられない。そしてやはり、縛り付けられている訳ではないのに身体はぴくりとも動かさない。

金縛りと言って差し支えない原因不明の全身硬直、辛うじて動くのは表情筋だけ。ただ一番おかしなことは、俺がこの状況に恐れも戸惑いも感じていないことだ。

これが初めてのことであったら驚いたと思う。しかし何度もこの身に起きているから、とても久しぶりの恐怖体験であっても、経験と慣れには勝てなかったようだ。

いつの間にか頭痛は和らいでいて、俺は身体を脱力させて奇怪な現状に流されている。そうする他ないことを理解しているから何もできないし、何もしない。

その時が来るまで完全に受け身でいるしかないことも理解していた。

それはほんの僅かな空白の時間だが、とても退屈だった。

早くして欲しい、久しぶりだとしても、それは決して待ち遠しいわけではない。

終わるまで決して解放されないから、ただ単にまどろっこしいという感情があるだけ。そんなことを考えていると近くに異物の存在を感じた。

(来た)

身体に何かが触れる、熱というほど暑苦しくはないが命を感じさせる微かな温かみ。

その正体こそ知らないが俺はその存在が現れることが分かっていた。

さつきよりもはつきりと、その生暖かい熱源が俺の身体にべたべたと触れてくる。

靄が少し掠れ、恐ろしいほど真つ白く華奢な五本の指が確かに現れる。

その指がぎゅつと太腿に食い込み、その細さに不釣り合いな力強さに俺は眉を顰めた。

———と、癖の強い花香はながのような甘ったるい匂いが嗅覚を刺激する。

鼻を塞ぎたくなるくらいに強い匂いだが、何度も嗅ぎたくなるような中毒性もある。

眩暈がするほどに強い芳香が鼻腔に潜り込み、その濃密さが思考を掻き回した。

その存在が熱と香りを携えて、とても近い距離まで身体を寄せてくる。

俺の下半身にべったり纏わりついて、異質な空気を周りに充滿させていく。

その匂いを嗅げば嗅ぐほどに、酒に酔った時のように周囲がくらくらと揺れる。

不動の身体はそのまま、暗い視界が安定せず勝手にゆらゆらと揺れていた。

曇った視界の中、靄に覆われていた手首から腕が順々に晴れていく。

(あぁ……)

——ぞくりと、背筋に冷たい空気が通り抜けるような感覚が沸き起こった。

そして突然、靄に肉感的な女体のシルエットが浮かんだかと思うと、影の輪郭そのままの妖艶な体躯を持った裸身の美女が、柔和な笑顔を浮かべながら現れた。

形のいいヒップを女豹の様に突き出し、蠱惑的なポーズで意味深に微笑みかけてくる。ふりつ、ふりつ、と誘うように臀部を振って機嫌の良さを表現する美しい女。

筋肉と脂肪が程良く付いたしなやかなボディラインに、俺は息を止めて見惚れた。

そして女は唇を動かす。

『——』

聴覚が鈍くなっているのか、それとも女の発音が不正確なのかは分からない。

結果的に俺は女が何を言っているかよく分からず、コミュニケーションは取れない。それすらもいつも通りで、言葉が分からなくても何を言っているかは大体分かる。

『ひさしぶり』と、女はそう言っているように思えた。

何度も同じ光景を見た結果として、段々と分かったような気になっているだけだが、何故か自分の中では当たっている自信がある。

それほどに、俺と女は付き合いが深いとも言えるだろう。

『——』

ふるふるしていて艶のある健康的な唇が更に小さく動く。

その曖昧な言葉の意味も俺は分かっていた、いつもそうだから。

予想通りの言葉が耳に届く、言葉は分からなくても意味だけは分かってしまう。

間違いなく、『俺を犯す』と言った。

その言葉に俺は喉を鳴らし、これから始まることに対して身体が準備を始めた。

微かな緊張感が全身に広がっていくのがわかる。

強かった指の力が急に弱まり、女は我が子を愛でるように優しく太腿を撫でてくる。

心地良い手付きで太腿をさする細指、それがしばらく同じ場所を行ったり来たりした。

そして身体の内側にある芯をほぐすように丁寧に、外から温めるのではなく内から熱

を生み出すようにマッサージを始めた。

ただ肌を触れられているだけなのに、もつと深い部分を触られている気がする。

女は太腿を撫で、揉み尽くした後、脇腹を経由して俺の胸部に大胆に触れてくる。

首周りをまさぐり、鎖骨を指でなぞり、胸板をフェザータッチして俺の反応を窺う。

いつも通り俺はまな板の上の鯉になって、女に好き勝手され続ける。

女は筋肉量確かめるように力を加えるが、薄い胸板に指が軽く食い込むだけ。

その頼りない身体を見た女が微かに笑ったような気がした。

ひとしきりボディタッチを堪能した女は、目当ての部分へと手を差し向ける。

へその周りで指を少しだけ遊ばせた後、すぐに手を股間まで伸ばしてきた。

俺の膨らんだペニスに触れて女は嬉しそうに笑う。

——と、いつの間にか身に付けていたはずの衣服が全て消え、俺は裸になっていた。  
(う……)

何度見られても、自分の裸体を女に凝視されるのは慣れない。

全身をじろじろと舐め回すように見られて、身体が火照りじわりと汗を滲ませる。

いつのまにか天井を向いていたペニスに女はじつとりとした視線を注いだ。

女の目的は俺の精を搾り取ること、だからこそペニスの膨張をとっても喜んでいる。

俺のペニスを自分の物とも思っているかのように、慣れた手付きで撫でる。

そのくすぐるような指遣いで竿の裏側を擦られて俺は下唇を噛んだ。

女の手捌きは相変わらずで、俺の性感帯を熟知した触り方に声が漏れそうになる。

ペニスを指で丹念に撫で、その膨らみ具合を入念に確かめる女。

その所作があまりにも執拗で巧みなせいで、ペニスはより太さを増していく。

ねっとりしていつこい愛撫だったが、僅かに物足りなさを感じる絶妙な匙加減。

その緩急優れた刺激に振り回されて、俺は不快感と焦燥感を同時に覚える。

そうやって俺を手玉に取るのが女の趣味なのか性癖なのかはわからない。

『——』  
ただ、今回もいつも通りだとすれば簡単に済ませてもらえないだろう。

俺の身体を苛め反応を見て楽しむこと、それが女にとっての娯楽なのかもしれない。

卑猥な行為をしている風ではなく戯れるように愛撫をする。快楽を求め、欲しがった

ら取り上げて、媚びへつらうまでお預け、そんな悪魔的な駆け引きを仕掛けてくる。

じゆるじゆると音が鳴るほどに、女は自分の指を舌で見せつけるように舐め始めた。

たっぶりの唾液で指先をコーティングして、光沢を得るほどにベタベタにしていく。

ぴちやつ、と生温かい水気がペニスに触れ、さっきより肌の触れ合いが滑らかになる。

手のひらの摩擦をほとんど緩和するほど、ペニスは女の唾液まみれになっていた。

ペニスが五本の指にしっかりと握り込まれ、生み出された直接的な刺激に俺は呻く。

ねっちより、ぐっちより、ホールドする指の力を固定して女は手を上下させる。

スローな手コキでじっくり責められて、動かない身体をどうにか動かしたいという衝

動に駆られ、それでも動けないもどかしさが着実にフラストレーションを貯める。

——ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、

生み出され、蓄積していく快楽を余さず受け止めることしかできず、思考が淀む。

パチパチと視界に火花が散り、歯を食いしばっても射精感を抑え込むことができない。

少しスナップを利かせた精液搾りの手技、その巧みな捻りに思考が漂白され——、

そしていつも通りピタッと手を止める。

「くっ……」

『』

甘い吐息と声が耳に届く、恐らく俺を小馬鹿にする言葉を並べているのだろう。

女は、俺が絶頂に達する寸前で止めるのが本当に好きだった。

手コキを再開し、ゆっくりと滑らせるように何度も擦り上げて、逝く寸前で止める。

再開して、寸前で止める。

再開して、止める。

自己満足のために繰り返すのではなく、それは俺の身体を弄り回す為の準備だった。

じっくりと潜在的な性感を育てて、一度目の射精を最高にするために仕込んでいる。

そんな拷問じみた愛撫がとても不快で、気持ち良かった。

「早く……」

俺が射精を懇願したのを見て女は笑い、手コキを少しだけ早くしてくれた。

そして、今度こそ後少し擦ったら射精しそうなくらいにペニスを追い込んだタイミングで、女は敢えてペニスから手を離してびくびくと全身を震わせる俺を見て嘲笑った。

『』

俺は息を荒くして、身体の中に蓄えられた快樂がぐつぐつと煮詰まるのを感じた。

射精感はゆっくりと和らいでいくが、それでも体内で煮えたぎる快樂は消えない。

そういう風にして俺の性感帯を開発し、作り替えていくのが女の目的だった。

散々寸止めを繰り返してひとしきりペニスの甘弄りを楽しんだ女は、ギンギンに反り

立った。ペニスの先端に軽く口付けをした。

「っ——」

キスをされただけで悶える俺を見て女は更に顔を綻ばせる。

よほど俺の反応が面白かったのだろう、何度も何度も亀頭に口付けを重ねる。

自分の大切なものを愛でるように、唇が触れていない場所がないほどにキスを隙間無

く見舞い、その度に俺は小さく声を漏らし、それを聞いた女の勢いが更に加速する。

一瞬の触れ合いが連続して、一つの長い刺激としてペニスに与えられていた。

(しつこい、って……)

もし女が口紅をしていたら、恐らくペニスは真っ赤に染められていただろう。

それほどに女の口付けは濃厚で愛情深かった。

——と、ようやくキスすることに飽きたのか、女は竿の根本からペニスをじっくりと舐

め上げて、べろおおん、べろおおん、と上下を行ったり来たりする。

棒アイスを舐め溶かすかのように、じっくりと長いストロークで往復する。

それは次の段階への合図だった。

わざとらしくペニスの近くで大口を開き、動揺した俺の反応を見て目元を綻ばせる女。ちろちろと舌を動かして見せた後、俺を怖がらせる為に歯をかちかちと打ち鳴らす。

そして女は一気にペニスを口の中に仕舞って、舌で竿の裏側をれるろると舐め撫でる。

「あああつ、ああつ……、」

ぬるりとした舌の感触がペニス全体を撫で回し、俺はすぐに根をあげてしまう。

「も、もう……」

早漏過ぎる自分にガツカリするが、俺は情けなく限界を告げることしかできなかった。さつきまで、徹底した寸止め手コキで極限まで焦らされていたのだから仕方がない。

しかし、すぐに女は口を離して射精寸前のペニスを解放する。

『、――』

手でも口でも、《決してすぐには逝かせてはやらない》という強い意志を感じた。

女はにっこりと笑いペニスを再度啜え直す。

さつきとは違い、頭を上下させてしつかりと唇で扱くフェラチオに変化した。

必死に動かす訳ではなく、滑らかに、リズム良く唇で吸い立てペニスを扱き続ける。

――じゅぽつ、ちゅつぽ、じゅぽつじゅぽつ、じゅるう、じゅぽう、

水気たつぷりのいやらしい音が耳に届き、あつという間にペニスは追い詰められた。

でも追い込むだけ追い込んで結局逝かせてくれない。

「もう、嫌だ……」

絶対逝かせてくれないとわかっていたはずなのに、少しでも期待した自分を呪った。

女は決して簡単に満足してはくれない。

散々俺を弄んでニヤニヤと笑う、本当に悪趣味な存在だと思いき知らされる。

『、――』

淫靡な水音が鳴るほど豪快に舌舐めずりをした女は、気怠げにのっそりと身体を持ち上げて俺の胴体を獣のように四つ足で跨いでいく。

肉食動物のように獰猛な存在感が女の全身から発せられ、俺を胃の中に収めてしまいたいという強い欲望が女の視線からひしひしと伝わってくる。

女が俺の鎖骨の位置まで顔を近づけると、熱を持った荒い息が俺の首筋に吹き掛かる。

――かぶ、と女はそのまま俺の首に噛み付いた。

牙を刺し込み吸血鬼のように血を吸うわけではなく、甘噛みで歯形が残るくらいの力で、じわじわと歯が押し込まれていく。

その痛みとも快感とも分からない曖昧な刺激に俺は眉をひそめた。

そしてすぐに、歯の痕が付いて赤くなっているであろう部分をチロチロと舐める。

肉食動物でありながら愛玩動物のように可愛げを振り撒く女、その纏うオーラと立ち姿の隔たりに俺は心拍が早くなるのを感じた。

正体の解らない存在は末恐ろしい。

しかし、女はその恐ろしさを帳消しにして余りある美貌を持っている。

美しさと恐ろしさを共存させていて、それに全く違和感がない。

女の美しさに魅了されている以上に、説明できない何かに虜になっている。

そんな底知れぬ魅力が女にはあった。

(ああ……)

またしても女と目が合うが、先ほどまでとは表情が変じていた。

女の目は人間と同じ形をしていたが、瞳孔だけが普通の人間の物とは少し違う。

細い菱形のような形、爬虫類に似た瞳孔を持つ女が目を強く光らせる。

瞳孔の変化と共に、スイッチが切り替わったかのように纏う空気も一変していた。

その恐ろしい眼だけは、何度見たとしても絶対に慣れることはないだろう。

女は人間ではない、どうしても納得せざるを得ない異質さに心臓が強く高鳴る。

脳が心臓を震わせて女が人ならざるものだと警告してくる。

でも姿形は完璧に人間だ。

とても綺麗な顔つきをしていて、肉感的で完璧なプロポーションを持つ絶世の美女。

でもよくよく考えれば、その完全無欠さこそが人間ではないことの証明にもなる。

(異常なんだ)

女は恐怖する俺を見て笑顔を浮かべ、俺はこの時間の終わりを悟った。

俺を玩具にするだけでは満たされないと、女の表情には溢れ出た情欲が滲み出ている。

『しぬまでまじわりましょう』

唇を動かしていないのに何故か俺は女の言葉を聞いていた。

理由は分からないが、そんなのは些細なことだ。

女の求める言葉に呼応して、俺の理性は瞬時に跡形もなく溶かされてしまった。

求愛され、ペニスが最大限に硬く太くなる。

いや、その限界さえも超えて、今もまだ膨張し続けているような気さえする。

俺はただ待つことしかできず、無抵抗な獲物を前に女は目を細めて舌舐めずりをした。

『たのしみましょうね』

女は腰を少し浮かせて、そそり立つペニスを指で支えて自分の膣口に添える。

少し触れただけなのにペニスがぴくん、ぴくん、と跳ねた。

恐らく身体の中の部分で撫で付けても射精に導くことができる透明感のある白肌。

その中でも膣の中は特別に気持ちがいいことを俺は知っている。

そして、今からその膣なかにペニスが挿入される。

濡れた膣口から漏れる女の愛液、ぬるぬるになった性器は肉欲への飢えを想起させた。

俺は怖くなって腰を捻ろうとするが、そもそも身体はずっと動かないままだった。

サキュバス×アクトレス①  
～淫魔だらけのAV業界で生き抜く方法～

よく分からない存在の生々しい肉弁にペニスが食われてしまう。  
美しい女と交われるとしても、そんな迷いが生じる程に目の前の存在は異質だった。  
『可愛い？』

強烈な恐怖心を感じさせる重圧が和らぎ、俺を慰めるかのように優しい表情に変わる。  
慈愛に満ちて、優しく見守るような表情でじっと見つめてくる。

そんな顔を向けられると、感情がぐるぐるとごちゃ混ぜになって思考も纏まらない。  
混乱して、混濁して、ああ、こんなにも俺は単純なのかと落胆する。

美しい表情で優しさを仄めかされ、それだけで俺は簡単に身体を許してしまった。  
何をされてもいいと勝手に頭が判断をして、全てを受け入れようとしている。

それだけの命令権と決定権、俺の意思を捻じ曲げてしまう《魅力と魔力》があった。  
その力を使えばどんな人間でも操れるに違いない、そんな——暴力。

『いいこ』

今度は聖女のように漂白された微笑みを浮かべ、改めて膣にペニスを近づけていく。  
既に抵抗する気は無くなっていて、むしろ挿入される瞬間に胸を膨らませている。

焦らされているような気がしてハラハラしながらその時を待つ。

ゆっくり、本当にゆっくりと腰が降りてくる。

挿入する瞬間、接触する二つの性器を凝視できるほどにスローモーションになった。



——くちゅつ、

「んあ……」

膣口と亀頭が口付けをする、俺は歯を食いしばりすぐ射精しそうになるのをこらえた。女はペニスを根元まで挿入せずに、入り口でぐりぐりと亀頭をマッサージする。

『——あは』

楽しみに女は笑う。

俺の欲望の姿形を全て理解しているからこそその余裕ぶり、付き合いが長いだけある。逆に、延々と射精させてもらえない俺は全く余裕がなかった。

膨らみ続ける射精願望と、それを抑制しようとする感情がせめぎ合っている。

戸惑いを隠せない俺の様子を見て女はますます口角を上げる。

どうすれば男の感情を掻き乱すことができるのか、完全に理解して転がしている。

射精どころか挿入できるかどうかも女の気まぐれで、ただ待つことしかできない。

女は自慰をする要領で、女陰じょいんにペニスを擦り付けて表情の硬さを解いていく。

頬を赤く染め、恥ずかしげもなく自慰を俺に見せつけて愉しんでいる。

自分が一度絶頂するまで、ペニスは挿入しないと決め込んでいるのだろうか。

「あ」

そして隙を突かれ、にゆるり、ぐにゆるり、とペニスが膣内に呑み込まれていき——、

《びゅるるううううううつ、びゅるるるるるるううううううつ》

唐突にペニスが膣内に挿入され、俺はあっさりと果ててしまった。

焦らされ過ぎたせいで、亀頭が膣奥に辿り着く前に暴発するように射精してしまった。

《びゅううううつ、びゅうううううつ》

膣肉が更にペニスを締め上げて、どくどくと精液が女の膣内に注ぎ込まれていく。

「はあ……、はあ……」

息が切れて全身が急激に脱力する。

心が大きな疲労感と満足感を得て、遅れてきた羞恥心がそれを大きく上回った。

一時の幸福感はすぐに打ち消されて、射精直後の興奮は沈むように掻き消えていく。

「くっ……」

自分の恥部を、正体不明の存在に曝け出してことを毎度のことながら後悔した。

欲望に突き動かされて、肉体と精神を辱められたことを脳が理解する。

『かわいい』

女は気を落とす俺を見て、より肌艶を良くして穏やかに笑った。

セックスは半端になっているのに、俺のプライドを傷つけたことに嬉々としている。

腰をゆっくり上げてペニスを引き抜くと、とろとろになった膣内が光を反射する。

精液が逆流するはずだが、物理法則に反して一滴たりとも膣から零れ落ちてこない。

それは手品ではなく、目の前の存在が化け物だということの証明に他ならない。

『もう』

そう言って女は苦笑する。

叱る風に俺の頬を指で突き、俺が射精したことを優しく愛情深く咎めてくる。

でも、それで終わるわけではない。

射精することが俺の義務だと、むしろ当たり前だと言いたげに、すぐに再開した。

「んく——、っああ」

もう一度、女は何の了解も取らずに膣をペニスに被せていく。

ぬるりぬるりと膣壁に纏わりつかれ、射精したばかりのペニスがぴりぴりと痛む。

しかし、先ほどよりも濃厚な愛液によって潤滑が増した膣の中ならば痛みは不要だ。

『ん、ふ』

形状を記憶したかのように膣肉がびったりとペニスに張り付いて、女が腰を上下させる度に膣壁ちひだの細かな凸凹が雁首を容赦無く引っ搔いてくる。

——たんっ、たんっ、たんっ、たんっ、

交尾をしているのに、女の顔にはずっと笑顔が張り付いている。

お遊戯をするように楽しそうに、リズム良く俺の下腹部の上で身体を弾ませる女。

同化したように一緒に身体が揺れ、その一体感にシンパシーを感じてしまう。

「あ、ああ……」

《びゆるるうっ、びゆるるるうっうううっ》

今度は何十回と、杭を打つように腰を打ち付けられた末に射精した。

女は射精した後も腰をぐりぐりと捻り回して、尿道に残った精液を搾り出していく。

俺は何度も限界だと手振りするが女は首を横に振る。

『まだ、だあめ』

残念でしたという風に困り眉を作って、けらけらと笑う女。

女は体勢を変えて、今度は俺に覆い被さってびったりと身体をくっつけてくる。

俺の胸板に柔らかい乳房をむにゅん、と押し付け腰の動きを再開する女。

上半身を揺らさず腰周りだけが器用に動く光景は異様で、別の生き物のように思えた。

その巧みな腰使いによって、杭打ちのピストンとは別種の刺激が生まれる。

次々に新たな快感がぶち込まれ続け、俺は呆気なく射精寸前まで追い込まれた。

——たっば、たっば、たっば、たっば、

リズムカルかつ小刻みに腰が動き、さっきより肌と肌の打ち鳴らす音が大きくなる。

——たっばん♡たっばん♡たっばん♡たっばん♡

「ああ、ああああああああ……」

押し寄せる快樂によって口から大声が漏れ出し、亀頭がムズムズして限界を迎え——、

《びゅるるうう、びゅるるるるうううつつうつつ》

俺が射精すると同時に、女は身体を更に密着させて唇を軽く突き出してくる。

『ちゅっ——んちゅっ、ちゅうっ、ちゅぷう、んちゅんちゅう、んっ♡』

いきなり舌を絡ませた濃厚な口付けが始まる。

そしてまた腰を自由自在に振って、ペニスを様々な角度から擦り、削り、搾り尽くす。唇と舌の甘い刺激と緩急をつけた腰遣いによって、またすぐに俺は果ててしまった。

《びゅるるるうう、びゅるるるるうううつつうつつ》

俺が射精していても全く気にせず女のディープキスは止まらない。

『——んちゅっ、ちゅう、れろおれろお、んっ、ちゅぷっ、ちゅっ——ふはぁ♡』

ようやく唇から解放されると、粘土の高い唾液が俺と女の舌に橋を架ける。

女のうっとりとした表情。その悦に入った美貌を見ているだけで身体が熱くなり、いくらでも精液を捧げたいと思ってしまった。

『あなたはわたしのもの』

俺の顎を指でさすり満足気に微笑む女。

母性的な身体にくっついていっていると、乱れていた感情が段々と安らかになってくる。

目と目が合う、さっきまでの異形の眼は普通の人間の目に戻っていた。

それはこの逢瀬が終わることを示している。

『さもちよかった？』

言葉にするのは恥ずかしくて、身体が動かないから頭の中で俺は何度も頷いた。

それが伝わってしまったのか、女も一回だけゆっくりと頷いてくれた。

(やっとだ)

終わりを感じ取ったことで、熱くなっていた思考が急激に冷静になっていく。

あれだけムンムンと匂い立っていた淫猥な空気は、いつの間にか消え去っていた。

(やっと、終わる)

自分の中に溜まっていた情欲が解放されて霧散するのを感じる。

穢れが身体から消えていくのを感じる。

『じゃあね』

名残惜しさはない、どうせまたいつか現れるだろうから。

またしても靄が深くなり、女の身体がその中に飲み込まれていく。

最後に掌だけが残って、左右に揺れているのを俺は見届ける。

靄が深まる、全てを覆い尽くしていく。

そうして無が訪れ、意識が途端に絶ち消えた。

第一話「AVエキスポ」

「うあ——、」

目覚めと共に全身がびくつ、と痙攣する。

焦燥感を覚えて、薄目で枕元のデジタル時計を見ると日曜日と表示されていた。

(ふう……)

仕事は休みだと脳が認識し一気に身体がリラックスしていく。

まだ眠気が強いが、寝たいという気持ちを嫌々抑えて目蓋を擦り、身体を起こした。

その理由は起きたばかりで意識が曖昧でも、身体が異変を訴えているから。

脳が自分の身体に起きていることを精査するように、全身の感覚を鋭くする。

「あー、くそ……」と、独り言が小さく漏れた。

下半身にとてつもない不快感を覚えて俺は苦虫を噛む——ただ、予測の範囲内の

ことだったから別段驚きはしなかった。

(この感じ、久しぶりだ)

そんな風に格好をつけるには今の自分はあまりにもみつともない。

俺は《夢精》をされていて、おねしょのような下半身の不快感に頬が引き攣った。

何故夢精をしてしまったのか、それは俺が数日オナ禁をしていたからだ。

自慰や性行為を長期間しないと、ペニスが睡眠中に自然と射精する。

精液が過剰にストックされた時に、古い精液を一部排出するための生理現象が起きる。

ただ、夢精というのは人生で何度も起きることではなく、結構珍しいことらしい。

その理由は、精液をおねしょと勘違いして処理してしまうケースがあるからだ。

よくある事例としては、思春期に精通と同じタイミングで夢精をすることがあり、俺

も初めて夢精をした時に粗相だと思っただけでパンツを洗ったことをよく覚えている。

だが、俺が夢精をしたのは別の理由によるものだ。

夢精というのは、《淫夢》という《性的な夢》を睡眠中に見た時にも起こり得る。

夢というリアルな映像体験、それが性的な内容だった場合に自動的に射精してしまう。

しかもその映像には近い人間や好きな芸能人も登場する、とても刺激的な内容だ。

ただ、性器を擦ることなく射精できるのかという疑問は当然あると思う。

しかし、男性器に全く触らず《乳首を刺激するだけでも射精する》ことはあり、脳の

刺激だけで射精することは人間の仕組みとしてあり得るが、まだ謎も多い。

大事なものは誰でも起こり得ることと、その頻度は多くないということだ。

淫夢は、『実際に見たことがない』という人もいるくらいに珍しい事象だ。

一度見たことがあっても、『その後一度も見なくなった』というのが殆どらしい。

しかし俺は思春期に一回目の経験をしてからも、ひっきりなしに夢精をしていた。遅くて一週間後、早い時には三日後には淫夢を見て、そのまま夢精に至る。

それを回避する為の方法はたった一つで、《毎日オナニーすること》ただそれだけ。オナニーすることを忘れると、数日後、決まったように淫夢を見てしまう。

だから、俺が夢精をする時は百パーセント淫夢を見た結果によるものだった。

「よい、しょっと……」

俺は上半身だけを起こした体勢のまま掛け布団を行儀悪く蹴り上げて、これ以上汚れが広がらないよう慎重に半ズボンを脱いだ。

軽くズボンの股ぐら辺りを触れてみると、乾いたのかあまり湿り気は感じられない。ただ、中のボクサーパンツにはべったりと精液が付着し、汚れてしまっている。

その染みはパンツの前面全てに広がっており、その射精量に自分のことながら引いた。恐らく、俺は普通の人より精子の生成量が多いのだと思う。

だからすぐに貯まって、すぐに排出される、それだけのことだと思うようにした。

記憶では、中学二年の頃に夢精をしてから自慰行為の作法についてネットで調べて、その時期は毎日欠かさないほどにオナニーに没頭していた記憶がある。

同じようにオナニーにハマった経験を持つ男性は沢山いると思う。

しかし俺は、自慰行為への依存が落ち着いたタイミングで普通から逸脱してしまった。思春期が落ち着いた高校一年生、オナニーの期間を置くようになった時に久しぶりに

淫夢を見た。その時はただの偶然かと思いい、そこまで気にすることはなかった。

ただ、数日後またしても夢精をしたことで異変に気付かされる。

その後も頻発する夢精、ただ、オナニーをした日だけは淫夢を見ることがなかった。結果、オナニーを数日我慢することで自発的に淫夢を見ることができるとわかった。

それを知ってしまった日から俺は、敢えてオナ禁をすることに決めた。

淫夢を見ることが楽しみで、わざとオナニーをせずにその時が来るのを待つ。

毎晩のようにパンツの中にティッシュを大量に敷き詰めて、夢精をしつかり対策してから布団に入る、そのためにお小遣いでボックスティッシュを買った時もあった。

現実世界の女の子に脇目も振らず、夢の中での逢瀬だけにのめり込んでいった。

(懐かしいな)

思春期の懐かしい思い出に胸を馳せ、センチメンタルな気恥ずかしさに浸る。

ただ、淫夢が常に一緒の内容だと分かった時、その習慣は辞めてしまった。

飽きてしまったらより刺激的な物を求めてしまうのは道理で、エロ本やAVのサンプル、様々な手段を講じてオカズを入手し、それらでオナニーをすることが日課になる。

オカズ探しに興味になったのもそれが原因だと思う。

仕組みは完全に理解した———したが、異常だということのも理解していた。

異常だとわかりながらも、身体に実害がないからと意識しなくなった。

毎日オナニーをするのは特別ではないし、した方がいいという話も聞いたことがある。だから俺は淫夢を見ないようにするために、毎日処理をすることを日課にした。

(失敗したなあ……)

ここ最近とある理由のためにオナニーをしなかった、その結果として夢精をした。

それはある種の警告のように、俺を咎めるように必ず同じ夢を見させられる。

その夢もまた異質で、とても人に話せるようなものではない。

よく分からない存在に無理矢理犯される——夢。

そもそも人間なのか妄想が産み出した空想の存在なのかも分からない。

一つだけ分かるのは、その存在が美しくエロティックな身体だということ。

夢の内容には飽きてしまったが、アレ以上に美しい女性は見ることがない。それは、

最近まで夢の存在を超える女性がいなかったくらいに、俺を魅了してやまなかった。

その存在が原因かは分からないが、俺は学校のクラスメイトや職場の同僚、テレビに映る芸能人など、それらの女性に対して恋愛感情を抱くことがなかった。

夢の存在が美し過ぎて、夢の中でそんな魅力的な女性と何度も交わっていたから、自分の中で女性の容姿に対するハードルが高くなってしまったのかもしれない。

得なのか損なのか判断できないが、俺はそれら全てを諦めて、受け止めた。

今となっては一生涯纏う持病のようなものと思って観念しているが、ただ一度だけ、

その正体不明の存在に対して珍妙な想像を膨らませたことがある。

それは伝承の中に存在する《サキュバス》についてだ。

夢精という現象、淫夢という事象、それはサキュバスと呼ばれる悪魔を連想させる。

生理現象を理論的に証明する手段がなかった時代、それを幻想的な存在のせいにした。

その結果として生まれたのが淫魔、サキュバスだ。

淫夢を見てしまうのはサキュバスによるもの、夢精をするのはサキュバスのせい。

そう考えると自分に起きていることの辻褄が合う、なんて推論を立てたことがあった。

しかしながら、サキュバスは《夢精を誘発させるだけの存在》ではない。

サキュバスと性行為を繰り返すと《健康被害があり生命に危険が及ぶ》とされている。

だから、本当に毎晩サキュバスとセックスをしていたら俺は死んでいるはずで、

自分が健康的に暮らしている今があることが何よりの証明だった。

幼い時分の恥ずかしい妄想、思い出すだけで恥ずかしくなってくる。

結局、自分の精力過多ということで俺は結論付けた。

そして、俺は歳を重ねるにつれてより一層精神的になってきている。

新作のAVに対する興味は尽きないし、新人のセクシー女優のチェックも怠らない。

そんな風に熟考に没頭し、ごちゃごちゃ妄想していると急に時間が気になった。

今何時だ？——と、枕元にコテンと転がっていたデジタルの置き時計を起こす。午前五時、まだ早朝も早朝だった。

予定の起床時間は午前九時、てっきりその時間に起きたと思ったのに全然違っていた。恐らくパンツが精液で濡れて身体が異変を訴え、それで起きてしまったのだろう。起きたくない時間に起きてしまい、不愉快な感情が一つ上乘せされた。

(さてと……)

起きるには早過ぎるが、下着の片付けをする為にどうしても起きなければならぬ。下着の処理をした後シャワーを浴びようと思い、とりあえず俺は浴室に向かう。

浴室横の洗面台に少々の水を溜めてその中にパンツを入れ、ある程度パンツの汚れを石鹸で落とし、水で流してから洗濯機の中に放り込んだ。

先に処理してしまえば他の洗濯物と一緒に洗っても不快感は軽減される。

今着ている寝巻きもついでに洗ってしまおうと全て洗濯機の中に放り込んだ。俺は全裸になって浴室の扉を開けると、少し涼しげな空気が身体を通り抜けて背筋が震える。

バスチェアに座り、水の温度を温かくしてからシャワーの蛇口を捻る。

汚れている部分を温かいシャワーで濡らして、乾いて若干こびりついているものを指で擦りボディースープで汚れを溶かし洗う、久しぶりのことだが処理の工程は覚えていた。

普通の男性は乾いた精液を洗い慣れていないと思うと、ある意味得かもしれない。

(そんなわけあるか)

自分でツツコミを入れて馬鹿げた思考をストップした。

寝ている間に汗を大量に掻いたようで、全身がいつもよりベタベタしている。

ついでだと思い全身にしっかりとボディースープを纏わせて、改めて下腹部を洗った後で寝汗を掻いた場所も順に洗っていく。どうせなら髪もシャンプーで洗ってしまった。

シャワーで全身の泡を流していくと次第に思考がまとまりだし、やっとこれからの行動について考え始める。

今から二度寝をしたとしても全く問題ないが、もし寝過ぎてしまった時に少々困る。ただ、予定の時間にはまだまだ余裕があるから、そこまで焦る必要はないのだが。

さっぱりして気分良く浴室から出た俺は、身体を拭いてパンツを穿き替える。

(ミスったなあ……)

一つ深呼吸をして昨晚のことを思い出す。

折角今日という日のためにオナ禁をしていたのに、水の泡になってしまった。

今日参加することになっているイベントの為に、俺は三日間のオナ禁に挑戦していた。

三日から一週間がリミットの俺にとっては、割と可能な範疇だと思っていた。

どうにか今日まで我慢できればと思っていたのだが、チャレンジは失敗に終わった。

それはそれで仕方がないと思いつつも、目標が達せられなかったのが悔しかった。

《AVエキスポ》

その名前を聞いたことがある人は本当にごく一部の人間だけだろう。

たとえAVが好きな人間だとしても、そのイベントに辿り着くのは更に一部だ。

しかしながら、そのマイナーなイベントは大型の会場を使い毎年行われ、チケットも即完売するくらいの大盛況ぶりです。盛大に、かつ、ひっそりと執り行われていた。

日本全国の、アダルトビデオメーカーやアダルトグッズを扱う企業が集まり、様々な事務所に所属するセクシー女優達がステージに立つ、二日間限定で開催されるイベント。ファン感謝祭的なステージや新製品の紹介ブースなど、参加する企業や事務所が、自社の魅力を様々な方面に知ってもらうために趣向を凝らす、エロの総合展示会だ。

勿論物販コーナーもあり、人気メーカーの新作を最速でゲットできたり、倉庫に眠っていたお宝商品などが特価で並んだり、買い物目的でも楽しむことができる。

テーマは『勃ちっぱなしの二日間、オナ禁して来てね♡』となっている。

オナニーを禁じる。つまりは性欲を昂らせた状態でイベントに参加してほしいという、少々やり過ぎた感じのある訓示だったが、俺はその通りに従ったのだった。

結局は失敗に終わったのだが、多少冷静でいた方が余計なものを買わなくて済むだろうと思ひ直し、前向きにイベントに臨むことに決めた。

今回が初めてのイベント参加だし、楽しまないのは損だと思ったからだ。

(やっつとだ)

小さく深呼吸するとスツと気が引き締まる。

とうとう、俺は待ち焦がれた瞬間を迎えることになる。

パソコンのスリープ状態を解除し、開いたままにしておいたインターネットブラウザを見る。そこには《AVエキスポ》の特設ホームページが表示されていた。

そしてプログラムの一覧が載っているページを開き、目当てのブースをクリックする。

《SCVブース》

パソコンのディスプレイいっぱい美しい女性達が映し出される。

白や水色の清楚感を漂わせた可愛らしいドレスや、胸元がざっくりと開いた赤や青色の派手なドレスを身に付けて、それぞれが自分の魅力を強調するポーズを取っている。

SCVとは、今現在で最も人気のあるセクシー女優の事務所だ。

《Sexy & Cute・VENUS》、アルファベットの頭文字を取ってSCV、所属女優は揃いも揃って女神と呼んでも遜色のない美貌を持ち合わせ、事務所名に全く劣ることのない多種多様な美女が揃っている。

第一線で活躍する有名女優を多数擁しているSCV。実は事務所がアダルトビデオのメーカーも兼ねていて、マネジメント力を活かした独自の作品を多数生み出している。

芸能事務所兼、アダルトビデオメーカーの二枚看板、それがSCVの強みだ。

(で、だ)

その大企業がどんなブースを出しているかというのと、なんと所属している女優と《握手ができる》、というシンプルかつ大盤振る舞いのブースだった。

更に、時間は短めだが女優さんと会話をする時間も設けられている。

それだけ？と思うかもしれないが、相手が超一流だということを忘れてはいけない。

SCV女優は高給取りで、漏れなく超高層マンションに住んでいるという噂もある。

全員がセレブ層、そんな近寄り難い方々と手を触れ合わせる、それだけで奇跡的だ。

ただ、イベントに参加する女優全員と握手するためには大金が必要だし、何周も並び直さなければいけないので現実的ではない。

ただ、俺は全員と握手するつもりはなく、握手したいのはただ一人だけだ。

ディスプレイに映し出されたSCV女優達の集合写真、その真ん中でお淑やかなポーズで座っている一際美しい女性。

その人も勿論、握手会を担当するメンバーに選ばれている。

俺が今一番に会いたい人物、業界のトップを張るセクシー女優、《杏奈鏡子》。

今年の現時点でのトップセールス。作品数は平凡だがそれぞれの販売本数が異常で、SCVの女優であるだけで平均よりも売れるのに、その中でも飛び抜けている。

その理由は完成され過ぎた美貌のせいだった。

麗しく流れる鶯色の長髪。

スカートから伸びる健康的でしなやかな足。

真っ直ぐこちらを見つめる、透き通るような青みがあった瞳とその秀麗な顔。

真正正銘の正統派美女、しかし杏奈鏡子の魅力はそれだけではない。

清潔さと可憐さを兼ね備えながらも、身体付きはとても淫猥で肉感がいい。

ベースのボディラインは痩せ型なのに、出る所はしっかり出ている贅沢な肉付き。

公式発表されているHカップのおっぱいは、清純な雰囲気を明らかに逸脱している。

鏡子の胸元とお尻は、ほどよい重量感を感じさせるゆったりとしたラインを描き、女性に興味がある年頃の男性なら漏れなく惚れてしまうだろう。

それほどに杏奈鏡子は美しかった。

そして、写真からは読み取れないがセクシー女優としてのスキルもずば抜けている。

容姿も良くて演技もできてセックスの技術も高い、太刀打ちできる女優は誰もいない。

非の打ち所がなく、作り物と言われてもおかしくない、そんなパーフェクトな女性。

鼻屑目では決していない———と思うが、鼻屑してしまうのは自認している。

淫夢によって上げられたハードルを乗り越えていた唯一の女性、それが杏奈鏡子だ。

デビュー当時、俺のセンサーが強く反応して手に取ったのがきっかけだったが、元々AVを見る機会が多かった俺は次第に杏奈鏡子に夢中になっていた。

(そこで、AVエキスポだ)

セクシー女優というのは、昨今のアイドルのように握手会イベントが高頻度であるわけでもなく、当たり前だが自分から気軽に会いに行ける距離感ではない。

それに、デビューしてからずっとスター路線で活躍していた鏡子は、ファンと至近距離で触れ合うようなイベントは、安全性の観点からも中々できなかつたのだろう。

だからこそ今回はまたとない機会だし、これから同じような機会は訪れないと思う。あまりに身構え過ぎているのか自然と身体が緊張してくる。

ずっと遠くから見えていた人と顔を合わせることができ、その実感が身体を震わす。

ほんの一瞬だということは分かっている、それでも刺激的な瞬間になるのは間違いない。そう思うと楽しみで楽しみで仕方がなくなった。

バスタオルで髪を拭きながら、俺はパソコンの置いてあるデスクに腰を下ろす。

(楽しみ過ぎる……)

数週間前に送られてきた当選メールには、チケット購入のアドレスとコードが記載されていた。その購入したチケットが目の前にあり、俺は思わずそれを指で撫でた。

倍率が高いわけではなかったが、それでも僅かな確率で落選するのが怖かった。

俺は鞆から財布を取り出し中から免許証を抜き取る。

イベントに参加する為には年齢確認と本人確認を兼ねた身分証明をする必要がある。

【唯野優司】  
ただのゆうじ

自分の名前が書かれたそれを確認する、更新も一年前にしたばかりだから問題ない。

免許証に写っているのは何の変哲もない、どこにでもいそうな平凡な男の顔。

そんなごく普通の自分が、自分とは程遠い場所にいる人と相対し、言葉を交わす。

(絶対に楽しもう)

握手をして、短時間の会話で何を伝えられるのかは分からない。

そもそも何も起きないかもしれない、でも何か期待せずにはいられない。

期待と不安がごちゃ混ぜになって、それでも希望に胸を膨らませてソファの上に寝転ぶ。準備は既に終わっているし焦って今から何かをする必要はない。

「ふあああああ……」

急に大きな欠伸が出た。

全身が脱力して視野が急激に狭くなるのを感じる。

(あれ、これは……)

濁流のように押し寄せてきた眠気によって、俺の目の前黒く染まった。



「ん、んう——ん？」

数秒前の記憶が無くて戸惑っている、窓から差し込んでくる陽の光が眩しかった。急に時間が飛んだような感覚。気がつくとな俺は、タンクトップとボクサーパンツという酷い格好でソファの上で眠っていた。

(あれ……?)

瞬きを三度して思考をゆっくりと動かすと、ジリジリと焦燥感が湧き立ってくる。いつの間にか俺は二度寝していたらしい。

慌てて身体を起こすと心臓がバクバク鳴り、何が起こったのかと目を丸くする。

(え?え?)

キョロキョロと首を振って周りを見渡し、スマホの電源を入れて時間を確認する。

十一という数字が目に入った瞬間に身体がビクツと跳ねた。

既に出発の予定時刻《十時》を過ぎている。

イベントが開場する十一時に入場する予定だったが、既に開場してしまった。

恐らく寝惚けた俺の仕業だろうか、目覚まし時計のスヌーズ機能は切られていた。

変に早い時間に起きてしまったから寝不足だったようで、そのせいで二度寝の睡眠時間が長くなってしまったのだろう。

床に脱ぎ捨てられていたシャツとジーンズを拾い上げ、急いで袖と足を通す。

慌てて顔を洗って、殆ど終わっていた荷物の支度を雑に片付けて家を出ようとした、

——したが、すぐに考えを改めて足を止めた。

(ちよつと落ち着こう)

焦って何か致命的なミスをするより、焦らずにゆっくり準備したほうがいい。

自分の服を見ると皺だらけで、見るからに部屋着という感じでみすばらしく思えた。

折角ずっと会いたかった人と会うのに、格好が付かなかつたら勿体ない。

一旦着た上下を脱ぎ捨てて、一番自分が気に入っている上下の組み合わせをクローゼットから取り出して身に付けた。

姿見を確認して、さっきよりも見栄えがマシになったことが分かり気分が良くなる。

冷静になった俺は、鞆にミネラルウォーターの入った小型のペットボトルを入れ、チ

ケットが入った封筒に同封されていたパンフレットを取り出す。

場内の地図など、既に何度も見ていたが改めて入念に確認をする。

俺が参加したいプログラムの開始時間は十二時半、今から向かっても全然間に合う。

開場時の盛り上がりを感じたかったが仕方ないと切り替え、俺は家を出た。

初夏が過ぎて、近頃は肌を感じる暑さがじんわりとしたものに変わり始めた。

そんな中、勢い良く風が身体を通り抜けて心地良さを感じる。

自転車を走らせて駅に向かうと、駅周辺は日曜だからか結構人がごった返している。

電子マネーで改札を通り抜け、一番早く着く電車に乗り、吊革を掴んで目的地に到着するのを待った。スマホで到着時間を確認すると思ったよりも早く着きそうだった。

「ふう……」

焦らなくて良かったと頬を掻き、誰にも気付かれないくらいの小さな溜め息を吐く。新しい乗客に身体を押され、俺は反対側の乗車口の前に押し出される。

——と、青空を透かした窓に自分の上半身が反射している。悲観と楽観が混ざって曖昧な表情をしていて、焦りながらも落ち着こうとする気持ち同居しているようだった。顔を両手で覆い、表情筋を指でぐにやぐにやとマッサージして、もう一度窓を見る。すると、引き攣った表情がスツキリとして笑顔も自然に浮かべることができた。

『まもなく、次の駅に停車します——』

アナウンスと共に人がぐいぐいと押し合いながら乗車口の前を目指す。

目的の駅に到着し、早足の人と歩調を合わせながら改札まで早歩きをした。

改札から出た俺は、さすがに朝昼何も食べずにイベントに参加するのはまずいと思い、すぐに駅構内のコンビニを探す。

確か会場は飲食ができなかった気がしたので、その前に腹ごしらえする必要があった。すぐにコンビニを見つけ、適当に朝昼兼用のご飯を買ってイトインコーナーに腰を下ろした。全身が凝っていたので、俺は椅子の背もたれに身体を預けて伸びをした。(空いて良かった)

購入したサンドイッチを包むビニールを破り、具の少ないそれを頬張りながら野菜ジュースで流し込んでいく。

すぐ食べ終えた俺は、その場でパンフレットに載っている会場までの地図を確認した。最短ルートでイベント会場に向かうと最寄り駅から徒歩で十分ほどかかるらしく、近からず遠からずの場所にその建物があるということだ。

コンビニを出て地図の通りにしばらく歩く。すると殆ど何もない殺風景な景色の中に、イベント会場になっている大きな建物が馬鹿でかくそびえ立っているのが見えた。

その建物全てがAVエキスポの為に使われていると思うと、その規模感だけでイベントの凄さが伝わってくる。

自分が一足遅いからか、イベントに向かう人の数はそこまで多くなかった。

しかし、既に会場内は大勢の人で溢れ返っているに違いない。

ようやくイベント会場の敷地に辿り着くと、俺は目的地に辿り着いたのを確信する。煌びやかで、派手派手な装飾をされた馬鹿でかい看板、間違いない。

何の催しか分からず近付いてしまっている家族連れがいるが、そこは絶対に入ってはいけないイベントだから逃げて、と心の中で祈った。

十二時には入場口に着き、俺は受付らしき場所に当たりをつけて駆け寄る。

「こちらはAVエキスポの会場ですが、お間違いないでしょうか？」  
女性の受付スタッフの丁寧な対応に思わず身体が仰け反る。

「は、はい大丈夫です」

恐らく間違っていないよう徹底しているのだろうが、真面目な感じでふざけたイベント名を確認されて俺は頬を引き曇らせた。

丁寧に入場口を教えてもらい、俺は少しげっそりしながら足を向ける。

そして、こんなことで心が折れていたら持たないぞと気合を入れ直した。

「入場券はお持ちですか？」

俺は購入済みのチケットを財布から取り出して入場口のスタッフに渡す。身分証の提示も必要だと事前に知っていたので、免許証も次いで手渡した。

「拝見させていただきます」

チケットに印刷された情報と免許証を並べ、スタッフが個人情報情報を照らし合わせる。何も問題ないとは思うが妙にドキドキした。

「確認できました、こちらの半券で再入場ができますので無くさないようにして下さい」  
半券を受け取り財布に仕舞い込む。

中に飲食店はないから、食事を摂りたい場合は一度退場しないといけない。

イベントは夜遅くまでやっているらしいが、夕食の時間までに帰ろうと思っている。入場口から施設の中に入り、床に貼り付けられた動線通りに通路を歩いていく。

すると、建物内に更なるイベント会場への入り口が見えてきた。

「荷物チェックをさせていただきます」

鞆を開けて机の上に置くと、スタッフが簡単な確認をしてOKサインを出してくれた。薄暗い通路を抜けると、光り輝く看板を掲げたブースが立ち並ぶ風景が目に入った。

「広い……」、と思わず声が漏れる。

コミックとかゲームショーとか、似たような風景を映像で見たことがある。この広い空間が、全てAVとアダルトグッズ関連の物で埋め尽くされていると思うと壮観だ。

こういうイベントに来たことがなかった俺は、それらを見ただけで目眩がした。

開場から時間が経っているからか、入り口付近にスタッフ以外の人は殆どいない。

その代わりにブースの前や、広いとは言えない通路には人がギッシリ詰まっている。

(凄い空間だな)

馬鹿でかい音量のダンスミュージック風のBGMが会場内に鳴り響いていて、遠目でブースを見ると、露出度の高い女の子達が複数人で売り子のようなことをしている。

そしてその女の子を左右から囲むように、カメラを首から下げた男達が膝を曲げる。

撮影OKならデジタルカメラを持ってこれば良かったと少し後悔した。

イベント慣れとでもいうのだろうか、写真撮影をしている人達は堂々として見える。

(めちやくちや見たいけど、それは後にしよう)

セクシーな格好をした女性を至近距離で見られるまたとない機会。すぐに見たいという感情に支配されそうになるが、自分の目的が達せられてからでも遅くはないだろう。人の波に飲まれる前にパンフレットを広げ、地図を見て目的のブースを探す。

イベント会場の、割と端の方に目的地があることは事前に分かっていた。

会場のだ真ん中にはメインステージがあり、オープニングトークや閉会式等の場内挨拶に使われたり、大手メーカーの演し物が行われたりする。

そこがうるさいからという理由で、メインステージの近くを避けたのかもしれない。会話をすることも握手会に含まれているから仕方ないのだろう。

呑まれるように人並みに紛れ込み、流れに身を任せながら目的地を目指す。

ブースの近くまで行くと、ようやく活気のいい人の声がちらほらと聞こえ始める。

入口からメインステージを通り過ぎて、ジグザグ曲がりながら会場の端に向かう。

赤やピンク色の光で覆われたブースが多く、夜の歓楽街にでもやってきたのではと思われる妖しげな雰囲気があちこちから漂ってくる。

知っているメーカーの名前を見つける度に胸を躍らせ、興味深そうな催しを尻目に、俺はそれらを全てスルーして歩みを進めていく。

通り過ぎていくブースに視線を奪われ、後ろ髪を引かれながらも俺は前を向いた。

しばらくたった広いイベント会場を歩き続け、やっとSCVブースに辿り着いた。

(すごく金が掛かってそうだ)

他のブースもキラキラしていたが、どちらかというと正統派な華やかさが漂っている。

コーポレートカラーである赤白黒の三色だけを使い、おしゃれさとシンプルさを兼ね備えたロゴが看板の中央に据えられている。

超大手企業だと実感させられる、正に王道に寄り添ったブースだった。

(あれ?)

しかしブースの前にはスタッフらしき人以外誰もいない。

行列ができていくかもと身構えていた自分にとっては、あまりにも予想外だった。

自分が一番乗りということはあり得ないし、何かあったのだろうかと周りを見渡す。

——と、ブースの前にポツンと置かれた大き目の看板に何やら書いてある。

【開始時間は十二時半です、それまでこの場所での待機はしないで下さい】

大きくそう書かれた看板を目にし、その横に記述された詳しい説明を確認する。

時間帯ごとに区切られたいくつものブロックがあり、ブースに来た来場者を先着順で

ブロック分けしていく、というようなことが書かれていた。

まず整理券を配り、ブロック毎に決められた時間にブースに集合する流れ。

確かにそうした方が長蛇の列が延々とできなくていいと思った。

自分以外の人間も同様に確認してきたので、俺は入れ替わるようにその場を離れる。  
(なるほど)

整理券の配布時間は十二時半きっかり。

その時間までは列を形成することが禁じられている。つまり、配布時間ちよどの列形成をするタイミングに合わせて、SCVブースにある程度近づいている必要がある。

列が既に作られていて長々と待つことを覚悟していたから、この仕組みはありがたい。SCV的には、開幕で列を作るとイベント会場を走る人間が現れると予見して、それでゆっくりめのスケジュールにしたのかもしれない。

集合時間に走ったり人を押したりした来乗客は警備員に事情を聞かれるだろうし、椅子取りゲームのように様子を伺いながら紳士に立ち回らないといけない。

となると、それまでの時間はどうかして潰さなくてはいけない。

三十分後にまたここに戻ってきて、改めて列に並ぶのが望ましいだろう。

当日の流れは全て把握していたつもりだったが、細部は見落としていたようだ。

(さて、どうしよう)

何の目的もなく練り歩くのもいいが、この広さと人の量を考えると少し歩き回るにもかなり疲れそうだ。とはいっても何を見ればいいのか急に振られると困ってしまう。

目的の一つに決めていたから、時間をどう潰すのかも当てがなかった。

(いや?)

ふと思いついた。

実はもう一つ、物凄く寄ってみたいと思っていたブースがあった。

ただ、そのブースに寄ってしまうと絶対に三十分では帰って来られない内容だったのだ、それ以外でどうか探そうと俺はパンフレットに目を走らせる。

どれも魅力的なブースということには違いないが、ちよつと足が向かないというか、どこことなくハードルの高さを感じてしまう。

スマホの時計を見る。このままずっと来乗客の波に流されていてもいいが、それはそれで不毛過ぎるし、ここで立ち止まっていることもできない。

(あー、どうしよ)

何も決められずにウダウダしていると、視界に学生風の制服を着た女の子の姿が映る。ブースなのか控え室なのか、よく分からない場所の前で暇そうに立っていた。

明らかにJKではない肉感的なスタイルを持っていて、そのバランスの悪さに眼が飛び出そうになるが、その女の子と目が合いそうになったので慌てて俺は目を逸らす。

もし見つけられていたら、彼女達のブースに引き摺り込まれていたかもしれない。

(ん?)

気がつくくと、自分の巻き込まれている人の波がある場所に向かっていった。

その場所はイベント会場内で唯一、長蛇の列を形成しているブースだった。

何だろうと思えばパンフレットを確認すると、それは下調べした時も行ってみたいとは思ったが、ハードルが高くて諦めた《禁断のブース》だった。

そのハードルというのは人によって様々だと思うが、自分の中に存在するプライドを全て捨てないと、簡単に跨ぐことのできない敷居の高さを俺は感じた。

しかし、人波はそのブースに次々と吸い込まれていく。このまま流れに身を任せていたら、俺は人任せにその禁断のブースに辿り着くことができる。

行列を形成してはいるが恐ろしく流れが早い。それなら待ち時間的にもちようど良いだろうと脳が都合のいい計算をする、本能的に足が向いてしまっていた。

しかし俺はその激流からどうにか飛び出した——引き返せなくなる前に。

流れから離れると、そのブースが人々を次々に飲み込んでいくのが目に見えて分かる。

そのまま飲み込まれれば良かったと後悔したが、俺は別の目的地を探そうとして——、

「おーい」

ひどく馴れ馴れしい声に呼び止められた。一瞬振り向くかどうか迷ったが、仕方なく横目で見るとニコニコしながら女の子が距離を詰めてくる。

(うわーお)

その女の子はおっぱいが大きくて、歩くだけで両の乳房を豪快に揺らしてくる。

絶対にセクシー女優だと言い切れる可愛らしい女の子。そしてそう断じてしまうのを申し訳なく思うくらいに、顔付きは清純な雰囲気漂わせていた。

(逃げよう)

歩くスピードを上げてどうにかスルーしようとした。

——しかし、ガシッと肩に手が乗っかる。

逃げようとした矢先に捕まり、振り返ると女の子は怒った風に頬を膨らませている。

「何で逃げるんですかー？」

わざとらしく胸を寄せて、ぱっと見の胸の大きさをブーストしてみせる女の子。

本当にでかい、今まで会ったことのある女性の中で一番でかいかもしれない。

「あはは、そんなに見たらだめですってー」

ぱしっ、と軽く肩を叩かれ、その反動で揺れる胸を見てしまって女の子が更に笑う。

「こーら」

そう言い胸を隠すように抱く女の子、更に胸が強調されているのは気のせいだろうか。

「お兄さん、ちょっと寄っていきませんかー？」

そう言う女の子は自分の服の胸部を両手で引っ張って見せ付けてくる。

その女の子が身に付けているピンク色のTシャツには達筆な筆文字が書かれていた。

ただあまりに胸が大きいから文字が読みづらく変形してしまっている。

ただ俺には、それが何と書いてあるか分かっていた。

【ちちもみ募金】

その意味の分からない言葉の羅列に恐ろしいほどの魔力を感じる。

本当に、誰がこんな危険な企画を考えたのかと問い詰めてやりたい。

「私のは揉めないんですけどー、私より胸大きい女の子のおっぱいが揉めますよー？」

「ええ……!!」

目の前の女の子も十分大きい、なのにそれよりも大きいという表現は驚きしかない。

思いがけず喉が鳴ってしまった。

「絶対お兄さんおっぱい好きでしょ、だったら揉まないと損しますってば」

ニカッと笑う女の子、《損をする》という言葉に俺は思考を惑わされる。

迷ってしまったら最後だ。

そのまま女の子に背を押されて、俺は流れに押し戻され待機列に並ばされてしまった。

自分の押しの弱さに腹を立てながら、結構な長さの列に並んだことが気になった。

列の進むペース的には、握手会の整理券配布の時間に全然間に合いそうではある。

そう思ったが列に並ぶこと自体に気が少し焦らされる。

(まあ、大丈夫かな)

せつかく並んだのだ、いい経験だと思って諦めるしかない。

——と、列に並ぶ人達が揃いも揃って同じ方向を見ていることに気が付いた。

ブースの壁に取り付けられた大きめのモニターの中で、複数の大きなおっぱいが揺れ

踊っている。ビキニを身に付けたスタイル抜群の女性達が、布越しに豊満なおっぱいを

様々な指使いで揉みしだいている映像が流れていた。

カラフルでビキニの形も様々で、胸のサイズもバラバラ。

でも平均して大きいのは間違いなくて、さっきの女の子よりも確実に大きかった。

(こんなの裸よりエロい……)

全裸より着衣の方がフェティシズムを刺激されるという人も多いと聞くが、それと同

じ理論でおっぱいも衣服に隠れていた方がエロいと感じる時がある。

布をぐいぐい押し上げるおっぱい、おっぱいを支えるピンと張った紐、その相互関係

がおっぱいの重量感だったり、柔らかさだったり、ハリを伝えてくれるからだ。

マニキュアの塗られた蠱惑的な指先が、母性の象徴であるふつくらとした乳房を潰す。

その光景は、《おっぱい》の持つ柔らかな温かみを卑猥なものに塗り替えていくようだ。

重力に従い自然と垂れ下がった乳房は牧歌的に感じられるのに、指先によって変形し

た乳房は何故別物のように感じられるのだろうか。

母性が歪められ、女としての悦楽を感じさせ、男を誘惑するための武器に変じる。

そんな様々な魅力の詰まったおっぱいに、夢中にならない男は絶対にいない。

ペニスが、ビキビキと勃起してズボンを押し破ろうと主張していた。周りに気付かれていないかソワソワしたが、鞆やらパンフレットやらで下腹部を隠している男がやけに多い。あの映像に魅了されて股間を膨らませてしまっているらしい。(仕方ない、仕方ない……)

映っている女優は全員一流の女優、しかもそれぞれ魅力的な乳房を持ち合わせている。タイプの違う顔、背丈もバラバラ、そしてぶら下がるおっぱいの形も多種多様。それぞれのおっぱいが同じ画角の中に収まっているだけで、相乗効果が凄まじかった。むちむち、ぶるぶるのおっぱいが、少し身体を揺らすだけでたぶたと弾んでいる。列がどんどん進む中、視線だけはずっとその画面に縫い付けられていた。

ちちもみ募金に並んでいる男達は全員、もれなく映像に釘付けになっている。

——と、画面に【自己紹介コーナー】という文字が可愛いフォントで映し出される。

引きのアングルが段々と一人の女優に寄って行き、画角がバストアップに切り替わる。童顔で、女優達の中で一番元氣な印象を受ける女の子がどアップになった。

幼い顔付きの割におっぱいのサイズは他の女優に全く引けをとらず、張りがあってツンと上を向いた美爆乳をぶるんぶるんと大袈裟に揺らしている。

ぴよんとジャンプすると、たつぷりと重量感ある乳房が男を誑かさんと上下する。

暴れ乳とでもいうのだろうか、ばるんばるんと暴れ回る乳房が俺の視線を泳がせた。

そして、黒い髪が引き立てているおぼこい童顔もまた素晴らしい。

そのギャップがより一層におっぱいの魅力を引き立てていた。

『甘宮<sup>あまみや、いちじ</sup>苺です、バストサイズは九十九センチのIカップです』

見たことがある顔と見たことのある爆乳だった。

画面上に、【甘宮苺】というピンク色の文字が可愛い装飾と演出で踊っている。

彼女はアイドル業とAV女優を兼業する、今話題のセクシーアイドルだった。

話題といっても自分が詳しいだけかもしれないが、それは置いておく。

甘宮苺は、ビタースウィートサワーというアイドルユニットのメンバーだ。

アイドルが乳房を露出するなんて普通はあり得ないことだが、彼女達は異端だった。

普段は可愛い衣装で着飾っていても、AVの中では躊躇なく肌を晒すギャップ。

今も男達のペニスを勃起させようと笑顔で素肌を晒している、それが堪らない。

『アイドルの生おっぱいが揉めるのは今だけ、急げ』

思わず吹き出しそうになった。

確かに前情報があった方が楽しめるだろうが、改めて言われるとインパクトが凄い。

少し柔らかなタッチでむにむにと乳房を寄せ上げし、力を入れなくても指がめり込む

ふわふわのおっぱいを弄ぶ苺。ペニスをめり込ませても余裕で飲み込む柔らかさだろう。

甘宮苺はAV業界でもかなり人気がある、それが分かるパフォーマンスだった。

悪戯っぽく笑い、さも画面の向こう側にいる男に好意があるかのように振る舞う。それはアイドル活動で培われた物なのか、天性の物なのかは分からない。

でも、それが抜群の効果として現れていることには違いなかった。

画面が次の女の子に切り替わる。

やはり胸のサイズが大きい、次のパフォーマン스가始まって俺は更に前のめりになる。

『立ち止まらず、前に進んでください』

スタッフの女の子がモニターに釘付けになっている男達にメガホンで声を掛ける。

慌てて列を進める男達、もっと映像を見ていたかったが仕方がない。

(凄かったな……)

とてもクオリティの高いパフォーマンスと映像美、AVのオープニングを思わせる演出だった。言うまでもないが、登場した女優達の艶かしい肉体も全て素晴らしい。

自分達のおっぱいの魅力を存分に披露し、男達の欲望を駆り立てるには申し分ない。それどころか、あまり興味のない人間ですら魅了してしまえる力強さを感じさせた。

(発売しないかな)

ちゃんと編集されていて、一回こっきりのイベント用とは思えない出来の良さだったから、発売しなくてもフルバージョンがどこかで公開されないだろうかと祈る。

俺は行列に並びながらそんなことを考えていた。

(やば……)

緊張し過ぎて手足が震えてきた。

今から、自分がおっぱいを揉む未来を想像して思考がぐちゃぐちゃになってきた。

自分が知っている女優のおっぱいを揉む。

しかも全員、芸能人クラスの容姿を持っている。

そして根源的な理由としては、俺は女性のおっぱいを揉んだ事がなかった。

女性のおっぱいに触れる機会は、全ての男性に均等に与えられるものではない。

誰もが女性と付き合い、簡単に親密な関係になれるわけではない。

逃げ道はあって、お金を払うことでどうにか触れることは可能だ。それはなんとというか最終兵器のようなもので、できればそのスイッチを押したくないのが男心だろう。

しかし今、そういうお店に行くよりもかなり手軽に、お遊び感覚でおっぱいが触れる

と知ったら、そんな素晴らしい機会は避けることはできなかった。

今並んでいる列はその天国に向かっている。

しかしながら、そんな下卑た欲望を持っていると周りの目に晒される状況は少々辛い。非常に人間らしい感情だと思いが、入った時の勢いが薄らいで段々と冷静になってく

ると、後から保身のような感情が湧き上がって自分を守ろうとする。

しかし俺は、その人間的な葛藤を乗り越え、自分の人生の幅を広げるために《揉む》。

『ちちもみ募金のブースはこちらです、是非ご参加ください』

真面目振った思考をぶち壊すアナウンスが辺りに聞き、俺は頬を引き攣らせた。どれだけ自分を肯定しようとしても、その行為のくだらなさがぶり返してくる。

行われることの差はあるが、女性の秘部に触れる為に金を払う行為は風俗のようなサービスに近い、それを否定するわけではないが今簡単に決めていいのだろうか。

そうなる心が尻込みし始めて、すぐにここから逃げ出したいという迷いが生まれた。でも、その迷いは振り払わないといけない。

今日はこの為にこの場所に来た訳ではないのだが、それでも揉めるなら揉みたいと思うのが男という生き物だと俺は思う。

おっぱいを揉んでいいと言われているのなら、据え膳食わぬは男の恥だ。

しかもタダではない、こちらにも金を払う、更に言うならこれは《募金》だ。

集まったお金は、性暴力の被害に遭われた方へのサポートをするために使われるらしい。とてもいい試みだと思うし、考えた人間は天才だと思う。

募金＝善行、いいことをするという思考の切り替えが、ここにきて有効活用された。

(あーあーあー)

心の中で大声を叫んで雑念を振り払う。

羞恥心が頭のとっぺんまで込み上げて全身が震えそうになるが、歯を食いしばった。

俺は今日、初めて女性のおっぱいを揉む。

《ちちもみ募金》というネーミングをくだらないと罵ったことを心の中で謝罪した。

「これから募金される方は、こちらを熟読してください」

自分の番が近づいて来た参加者に向けて、ルールの書かれたボードが手渡される。ちちもみ募金のルール、確かに女優の安全を守るためには必要なものだ。

- ・揉む前に必ず消毒液で手を綺麗にする
- ・爪が長い方は指を使わずに揉んでください
- ・女の子がストリップと言ったらストリップ
- ・女の子が嫌がるような言葉はかけない
- ・おっぱい以外には触らない

正確にはもっと細かいルールが小さな文字で書かれているが、走り読みしたが恐らく違反者への処罰のような内容が書かれていたので割愛することにした。

さすがに、こんな場所でルール違反をする度胸のある人間は少ないだろう。

「アルコール消毒をお願いします」

机の上に置かれたボトルをプッシュして、噴射されたアルコールを手指に馴染ませる。

清めの儀式は全て終わり、後は本当におっぱいを揉むだけ。

心を集中し、俺は祈るように両手を合わせた。

# サキュバス×アクトレス①体験版 ～淫魔だらけのAV業界で逝き抜く方法～

発行者：一式龍一

サークル：TF文庫

- 無断転載、複製、複写、再配布、ウェブへのアップロードはご遠慮下さい。
- **Reproducing all or any part of the contents is prohibited.**
- 禁止私自转载、加工
- 무단 전재는 금지입니다.